学会（研究委員会）主催の外国人研究者の講演

〔1996年6月4日火に横浜市立大学で開催された講演の要旨〕

アメリカにおける道德教育の最近の傾向：民主主義への教育

William M. Kurtines

(Florida International University)

本日は親や先生をいつも悩ませ、現代社会の全ての構成員と市民に主要な関心となってきた問題、すなわち子どもの道德教育について話す。アメリカでは20世紀末に近づくにつれ現われてきた重大な挑戦を、新しい緊急な意味をもつと考えている。すなわち、道德観の社会的、哲学的基礎の崩壊である。21世紀に扱わなくてはならない最も重要な挑戦の内の2つである。これらの挑戦は既にアメリカの道德教育観に有意な影響を及ぼしている。しかしアメリカだけに限るものではなく、世界的意義をもっている。最初にこの挑戦を詳細に述べ、その後、今起こっている反応を述べる。

道德の社会的基礎の崩壊：犯罪と暴力への挑戦

第1の挑戦、道德の社会的基礎の崩壊は、現代社会の構成員と市民の生活に直接影響するものである。道德の社会的基礎の崩壊の直接的で明白な結果の一つ、若者の暴力的犯罪、非行、麻薬の乱用の増加と、司法、刑法などの機関の重責が増えたことである。増加する社会的不調和に関心が高まり、若者の道德教育の問題の広範な解決策の探求にいたっている。

道德の哲学的基礎の崩壊：ポストモダンの挑戦

第2の挑戦、道德の哲学的基礎の崩壊は、現代社会の構成員と市民の生命に直接には影響するものではないが、その意義はさらに広範である。20年前から生じてきた劇的な展開は普遍的または客観的知識への信念の伝統的な哲学的基礎と、自己の意思決定と行為に責任があるという信念に挑戦している。その結果、段々と相対主義、統制の喪失、無秩序と混乱を予期するようになった。

この挑戦は、道德教育の領域外で生じ、多様な形態をとってきた。ポストモダン、ポスト構成主義とポスト実証主義と記述される運動、観点と伝統は、「知識」そのものの概念、少なくとも普遍的、客観的知識の概念を問題にすることで、普遍的または客観的道德的知識の考えに挑戦してきた。ポストモダンは、このような挑戦に共通するテーマや問題をさして、広く用いられている言葉であろう。ポストモダンの批判の主要な評は、普遍的、客

観的、累積的なものとしての「合理的」または「科学的」知識観の基礎になっているメタ物語(meta-narrative)への挑戦である。モダニストのメタ物語の挑戦でポストモダニストは、知識生成の可能な諸対話の一つとして、モダニストの、世界の「客観的」、「普遍的」真理の構成または発見の信念にアプローチしている。ポストモダニストの伝統は明らかに知識の随伴的と文脈、文化的、歴史的の範囲の境界を超えた人間の探求様相が不可能であることを認識している。

ポストモダニストは全称知識を批判し、道德的真理を含む世界の客観的、普遍的真理の構成の概念に「脱構成的」技法を使って挑戦してきた。

道德教育での選択肢

道德観の社会的、哲学的基礎の崩壊は道德教育観にも挑戦してきた。これらの挑戦に対する選択肢はなにか。1つはこれらを無視すること、過ぎ去るのを待つである。もう1つは、このセミナーで論じることであるが、この挑戦は容易には去らなく、過ぎ去るのを待っても去らないことを認識することである。この選択では、これらの挑戦を認識するだけでなく、道德教育観を再評価し、この挑戦への応答について何か新しい考えをはっきりと表現することが必要である。

歴史的に、アメリカの道德教育では3つのアプローチがあった。

第1は、品性教育であり、1920、30年代に公立学校で優勢であった。品性教育は、人格特性と特徴（例えば、正直、忠誠、自制、責任など）の発達と、これらの道德的「徳」や価値の教授と学習を目的にした教育実践として定義される。

第2のアプローチは、価値明確化であり、人は異なった価値をもつことを認識し、生徒に特定の価値を教化することなく、諸価値を差別することなく、自身の価値を探求するのを奨励する。価値明確化は1960、70年代に最も影響力をもち、その強調するところは、多様な価値への開放性の教授である。

第3のアプローチは、認知的一発達のアプローチであ

り、1970、1980年代に優勢であった。道徳的発達とは人間発達の自然な結果であると考え、デューイ派の伝統により、最も自由で、最も十全な方法で心理的発達を可能にさせ、知的、道徳的成長と発達を促すことを目的にした教育的実践を強調している。このアプローチ、ピアジェとコールバーグのアプローチは、最もよく知られたものであり、後に述べる「民主主義への教育」と呼ばれるアプローチへの出発点となっている。

民主主義の進化

道徳教育者として直面している2つの重要な挑戦と考えることの発生を詳しく述べた。これに加えて、もう1つの「静か」であるが、重大な影響を与える可能性のある変換が起こった。道徳教育だけでなく、未来観を劇的に変える可能性をもったものである。この変換は民主的生活様式の進化を含んでいる。

民主制度の全世界的広がりへの影響は劇的であった。この変革に伴った新しい方向と目標観は時代の質を変えてきた。歴史的な民主的社会生活様式の発生は、種の社会化の歴史で生じた最も開放的な変換の1つを構成している。現代世界で起きている民主的理念の支持され、広がった制定は、社会的変革を開放的かつ民主的にする可能性を実現する手段、すなわち、全ての人間が自己の生命に影響する意思決定過程に平等に参加する機会を与える理念を実現する手段を与えたので、自由化の大きな力をもっている。

民主主義への教育：共構成主義的アプローチ

1990年代の挑戦への基本的な反応は、民主主義への教育の共構成主義的アプローチと呼ぶものである。このアプローチは、これらの挑戦から学び、生じた積極的な発展に拠り、将来に注目することである。そのねらいは、道徳教育について学んだことの実践的達成を貯え、それを可能な限り未来の挑戦に向けて拡大することである。その過程で、研究者としてまた教育者として、民主的社会における道徳教育についての考え方を体制化する枠組みを作ることには挑戦してきた。

民主主義への教育としての共構成主義的道徳教育観は、道徳教育の伝統的アプローチを基礎にし、それを拡張している。始めに、道徳的価値の教授・学習としての道徳教育観で、アメリカで再興した品性教育運動に拠り、人格特性や「徳」と概念化される特徴よりも価値への同意の教授・学習を強調した。生徒自身の価値探求を促進するため価値明確化アプローチに拠ったが、このアプローチを、択一的な価値への開放だけでなく、批判的評価的諸価値の批判的意思決定と問題解決の使用を含むところ

まで拡張した。

最後に、認知的発達の「道徳的」発達観を道徳教育の目標やねらいとして拡張した。共構成主義的アプローチは道徳教育の目標として道徳的推論の発達を考えるが、それは唯一の目標ではない。このアプローチでは、道徳教育を民主主義への教育のより広い過程の一部として考え、必然的に批判的意思決定と問題解決技能を含む広範な技能と効力の発達と使用の促進をねらいとする教育を含んでいる。

とりわけ若者の間で増加する犯罪と暴力でもたらされる挑戦への反応として、道徳教育で自己の決定と行為への責務を受容し、批判的意思決定と問題解決技能を使うことを通じて自己陶冶、責任、自己制御力、責務と自己調整（例えば個人的責務や自己陶冶）を育成することに焦点をあてた。普遍的、客観的道徳的原理についてのポストモダン主義の批判による挑戦への反応として、道徳的ジレンマ解決での批判的意思決定と問題解決技能の使用の育成に焦点をあてた。そのようにして批判的技能育成を強調するデューイ派のプラグマティズムの伝統にいたった。

道徳教育への共構成主義的アプローチ：アメリカとブラジルの経験

道徳観の社会的、哲学的基礎の崩壊による挑戦に対して、教育者として道徳教育介入を開発する考え方を体制化する枠組みを与える道徳教育への具体的、実践的アプローチを表わす課題に取り組んだ、すなわち、道徳教育の択一的方法を積極的に探索し、実践することであった。このアプローチは、プラグマティズム志向であり、人間行動と発達の共構成主義的アプローチから派生している。自己指向的、目標志向的、生物心理社会的有機体としての人間の種は、他の種と同様に絶えず変化する状況にうまく適応する課題に直面する。しかし人間は環境での変化に反応するだけでなく、その状況を形成し、影響する能力も有している。人間は、生命の質に影響する意思決定と問題解決活動に従事することを可能にする複雑で高次な認知的、伝達的能力を備えている。人間行動と発達へのこのアプローチは道徳教育プログラムの開発と実行の努力に理論的枠組みを与えることとなる。

先に述べたように道徳観の社会的、哲学的基礎の崩壊による挑戦はアメリカだけに限られるのではなく、世界的規模である。共構成主義的アプローチを用いた法を概観して結論にしたい。このアプローチでのアメリカとブラジルの経験を簡単に述べる。

アメリカでの経験

アメリカでの経験は、共構成主義的アプローチを用いた道徳教育プログラムの開発と精選を目的にマイアミの高校生の現在進行中のプログラムである。介在がプログラムを実施している公立高校はオルタネイティブ学校（退学予防を目的にした）であり、デート・カントリー学校システム（Dade Country School System 全米で3番目に大きい）の一部である。介在は1994年教育委員会で採用された品性教育の一部である。生徒の殆どは、中の下と下の社会的経済的階層（SES）である。

人生選択課題（Making Life Choice Workshops, MLCW）と呼ばれる介在は、コンピテンスと規範構成要素をもっている。コンピテンス構成要素は道徳的選択を含む人生選択をする際の批判的、民主的意思決定と問題解決技能の使用の促進に焦点をあて、規範的構成要素は責任ある人生選択を促す法として自己の統制と責務の受容を促進することに焦点をあてている。

ブラジルでの経験

ブラジルでの経験は、共構成主義的アプローチを用いた道徳教育プログラムの開発と精選を目的にボルト・アレグロの高校生での現在進行中のプログラムである。介在がプログラムを実施している公立高校は州学校システムに属している。生徒の殆どは、中の下と下の社会的経済的階層である。認知的構成要素（すなわち、批判的、民主的意思決定と問題解決）の焦点は、直接、ブラジルの民主的構造基盤（すなわち、民主主義への教育）を創造することをねらっている。

ブラジルの道徳教育

過去20年間（1964—1984）、ブラジルでの道徳教育課程は軍政によって制定されていた。高校と大学での必修課程は、「道徳教育と公民」であった。その頃の学生（その多くが今教師である）は道徳の時間に出席し、軍の代表が述べる「良きブラジル人」の話を開かなくてはならない。法と秩序への尊敬と権威への従順が強調され、それらは軍制が行った憲法修正により正当化された。これらの「教師」の殆どは生徒を脅迫した。地位で表象される政治的価値

への挑戦は、批判的思考や批判的考察とともに、強制的に思い止まられた。力と脅迫がブラジルの権威の再生の主たる道具であり、道徳教育の核であった。

1984年ブラジルは民主的政府を復活させ、「道徳教育と公民」は廃止された。人生選択課題は、道徳的選択を含む人生選択をする際の批判的、民主的意思決定と問題解決技能の使用の促進を意図した高校生のための道徳教育課程の一部として実行される介在である。上述したように、個人に、中核が民主的である実践の使用（すなわち、批判的思考と批判的考察）を促進する教授と学習を、民主主義への教育の基本的要素と見なしている。中核で民主的な実践の使用を個人に促すことはまた同様な実践の使用の制度化を促進する。

教育と民主主義の未来

最後に民主的人生様式の進化を促すには多様な民主的組織からの制度的努力と専心が必要であると言いたい。ここでの関心は、制度の役割そのものでなく、この潜在的なもの、すなわち教育の実現のために最も重要な組織と考えているものである。教育は現在の社会的組織の人生の質を高める広範にして、最も大規模な影響力を持ちうる力を持っている。

民主的制度の広がり、社会的進化的変革の長期課程の所産であった。さらに、その過程は完結するものではなく、必然的に進行する過程である。しかしながら、民主的人生様式の進化は、全人類に自己の生の質に影響する意思決定の過程に参加する機会を与える可能性を持っている。このように、実践において地球規模で民主的理念に近づくことは、莫大な挑戦であるばかりでなく、そのような目標を達成するのに必要な長引く専心の差し迫った価値となる。その結果、民主主義への教育は今日ののための教育ではなく、明日のための教育でもない、明後日、将来のための教育である。

担当：大西文行 横浜市立大学 国際文化学部・国際文化研究科 教育心理学研究室

Email :

TEL/VOICE : 045-787-2083